

第 14 回 小中一貫教育校検証部会 会議要録

開催日時	平成 27 年 11 月 25 日（水） 午前 9 時 30 分～11 時 30 分	
会 場	教育委員会室	
出席者	委 員	酒井朗 木下川肇 田頭裕 池田和彦 勝亦章行 伊藤安人
	協力委員	伊藤秀樹
	事務局	統括指導主事、新しい学校づくり担当課
傍聴者	なし	
案 件	(1) 練馬区における小中一貫教育の評価方法について	

1 部会長挨拶

部会長

ただいまより、第 14 回練馬区小中一貫教育推進会議小中一貫教育校検証部会を開会いたします。

本日、この小中一貫の推進会議検証部会は、最終回となります。2 年半くらい、準備委員会を含めると、2 年ちょっとになりますね。いろいろ本当にお世話になりました。

本日、この区内全体でのその検証の評価の方法ということで、ご検討いただきたいのですが、それぞれのその学区、学校ごとにいろいろなお事情があることは、前回のお話でもいろいろ出てまいりましたので、それを踏まえまして、事務局のほうで検討いたしました。それで、一言で申し上げれば、練馬区の小中一貫教育が、今後、いい形で発展するように、そのような方向で検討を進めさせていただきたいと思えます。

報道によりますと、東京都のほうが小中高の一貫校をつくるという、あれは沙汰やみになったのかと思えば、やはりつくるということで、そのようなことも都のほうでは考えていくようですけれども、練馬区のほうとしましては、この小中というところで実り多い成果が出るような形でこの評価ということについても検討させていただきたいと思えますので、よろしく願いいたします。

2 練馬区における小中一貫教育の評価方法について

部会長

では、早速、まず事務局のほうからご説明いただければ。

事務局 (説明)

部会長

今ご説明がありましたとおりでして、今日ご検討いただきたいのですが、事前に事務局といろいろ検討いたしまして、全区的に評価をするという作業がなかなか難しい、いろいろなことを考えなければいけないということで、どういうことを検討したかということをお話をもう少し差し上げますと、最初に考えましたのは、今日の資料でいきましたら、この資料の

4の3ページにいわゆる小中一貫教育がめざすものというシートがあります。ここにある学習意欲の向上と自己肯定感の高まりと不登校の減少というのを小中一貫教育がめざすものとして掲げている。論理的に言いますと、これらについて小中一貫教育、全区的な取組がどれだけこれに貢献したのかということを検証、評価するという、そういう枠組みももちろん考えてはみたのですが、今後、この評価という作業を1回のみならず、毎年何年か継続してやっていくということを考えた際に、これらのその項目がどんどん高まっていけばもちろんいいのですが、なかなかそういうふうには、要するにこれらの項目は全て小中一貫教育だけの取組がストレートにこれらに反映するというよりも、いろいろな要素が絡まって、各学校で学習意欲が高まったり、なかなか伸びなかったり、そういうことだと思うのです。そうしますと、これらを指標にして、小中一貫の成果を検証するという枠組みが、かえって各学校のその意欲を削いでしまうのではないかとというふうに懸念いたしまして、それよりも前回お話しくださったように、各学校でそれぞれ年度ごとに小中一貫で取り組む課題というのを恐らく設定していただいていると思いますので、それに基づいて学校評価の中でその項目を1項目、2項目、立てていただいて、それは検証しよう。そういう枠組みで、各学校ごとに重点目標を決めて、それについて学校評価の中の一貫として、評価していただく流れのほうが、いわゆるPDCAサイクルに乗った形になりますので、いいのではないかとというふうに1つ考えたところです。

それから、連携クリエイター調査は、これまでもやっておりますし、連携クリエイターの方に課題について意識していただくことは非常に重要だと思いますので、これはこのまま継続してやっていければいいのではないかと。

それから、もう1つ考えましたのは、小中一貫教育は特にその若い先生方にとっては検証的な効果が非常に高いだろうということで、その方たちが意識が高まっていけば、何年か継続してやっていく中で、職員集団全体の意識も高まってくるだろうというような仮説のもとに、若手の方を対象にした調査、それが当初は2年次研修、3年次研修まで含めてそういう研修の機会に何らかのこの課題についての調査はできないかということで、事務局との打ち合わせは終了なのですが、事務局のほうで、2年次、3年次研修の活用は難しいということで、今日出てきたのでは初年次の研修と転入者研修の調査という形になっておりますけれども、趣旨としましては、今申し上げたような若手教員の研修的な意味を込めて、小中一貫教育の評価を彼らに対してしてもらおうということがいいのではないかと。ここは、どうしたかといいますと、どういうことをこの小中一貫教育に携わる中で気づいたか、学んだのかとか、そういうその積極的な評価といいますか、そういうところを中心に、少し書いていただくというのがいいのかなというふうには考えております。

ちょっとこちらのほうで少し考えた経緯と、一応具体的な提案としまして、今3点お出しいたしました。どこからでも結構ですので、ご意見いただければと思います。よろしくお願いいたします。

一応その前回の先生方のご意見を踏まえた形で、何とかこの評価という作業が全区的に取り組めるようにと思っただけでありますが、さらにこういう観点が必要ですか、こういうことができるのではないかと、そういったいろいろご意見をいただければというふうに思います。よろしくお願いいたします。

委員

初任者研修で、小中一貫教育に関する研修を行うということについては、それはとても意義があつてとてもいいと思いますが、果たして初任者がその小中一貫教育の取組に対して成果をきちっと把握して分析し、それを文章化するということができるかという難しいと思います。

初任者だと自分の授業の研究だけで精一杯ですから。

部会長

そうなのですね。いや、おっしゃるとおりで。私も今日、初任者になってしまったのだと、ちょっと思っていますので、3年目ぐらいをイメージしていたのですね。

委員

むしろ調査するのは教務主任クラスがいいのではないですか。

部会長

そうでしょうか。

委員

初任者は先ほど言われたとおり、研修にはなりません。練馬は小中一貫をやっているのだということは、頭に思っても、それを評価というのは、とても無理だと思います。

部会長

その話の中では初任者という話はそこでは全く出ませんで、若手の先生方がこういうその取組の中でいろいろ気づくことが多々あるというようなこと、そのお話をいただきまして、それで研修で若手の研修はかなり、3年次研修をイメージしていたのですけれども、私は。そのあたりで少し先生方から意見を聞くのが、この取組の積極的な評価に繋がるかなと思ったのですね。ただ、先生おっしゃるとおり、それはもう少し主任クラスのほうがむしろ具体的な客観的な評価という意味では、いいのかもしれませんが。

委員

結局、3年次ぐらいの先生というのは、自分が学校に入ってからずっと小中でやっていた、それが当たり前で、比較の対象がないわけですよ。教務主任クラスであれば、そうではない、やっていない頃からの経験がありますから、比較しながらこれがいいとか悪いとかいうことができるわけですよ。

部会長

それは一方では極めて客観的に、これは評価ができることになると思うのですが、各学校でそれが積極的に取り組んでいらっしゃる校区といえますか、学校のところはそれでいろいろな形でいい結果が出てくると思うんですけれども、学区によっては、かなり課題の指摘が多々あるような評価結果になる可能性もあるのですけれども。

委員

それは現実の姿であって、それを教育委員会がどういうふうに判断をするのか、課題があるところを改善するように促していくのか、課題は課題としてもう少しやらせるのか。

部会長

全区的にそういう形で取り組んでいくのであれば、先生おっしゃるとおり、そのクラスの先生方にお聞きするのが一番妥当だというふうに思います。

確かにそうですね。

委員

教務主任クラスは小中一貫にあまり賛成していない教務主任も多いかもしれませんから、批判的な意見が増える可能性はありますが、それは現実の問題として、彼らがリーダーで学校を動かしているわけですから、そのリーダーの意識がまだこのくらいなのだという把握にはなりません。それで、その次として、このまま何もせずに施策を打たずにやっていったら、やはりだんだんと下降傾向になってしまうという見通しも立つから、何か次の施策を打っていかねばいけないという判断になると。

部会長

極めてそうですね。

委員

現実に蓋をするのがいいのか、現実をしっかり掴み取るのがいいのか。

部会長

そうですね。どちらかという、いい面をポジティブな面をすくい上げて、それで評価として見せようという考えが、話の中ではどちらかという強かったものですから、先生おっしゃるとおりで、これを今後改善しながら、より発展させていくという考え方であれば、教務主任クラスの先生に聞くのが一番現実がわかります。

委員

どういう意見が出てきても、練馬は当分は小中一貫は変えないのだという方針だから、どんどんみんなの考えることを言ってみると言って、取り上げられるなら取り上げて、改善していくぞという姿勢を示すのか、どうかですね。

もし、期待される答えが欲しければ、校長に聞けばいいと。肯定的なことしか多分返って来ないと。

部会長

そうですね。

委員

例えば、今年研究グループなのですが、講師予算費というのが、用意されているのですよね。研究グループが実践グループになると、その予算措置がなくなるということは、今やっている取組ができなくなるのです。講師招聘ができなくなります。

部会長

そうなのです。それで評価も下がる。

委員

ということですよ。

だから、評価が下がるということの背景には、いろいろな要素がそれぞれあるわけだから、

ただ単に数字で下がったということを学校に、やっていないではないかというふうに言われても、そこは困ると思います。

そこを練馬区がどういうふうにこの研究維持を図っていくバックアップを用意するか、準備してくれるかというところもあると思います。

部会長

そうですね。如実に研究グループから実践グループに変わると、評価が下がる傾向がありますので、それもありましたので、この評価をどの面を取り上げていくのかで先般は事務局のほうとこういう状況の中でどうやって評価していこうかという話をしていたのですが、おっしゃるとおりで、練馬が今後、しばらくはこの取組を区の施策として重点課題として継続していくのであれば、それなりの態勢とそれからそれに対するある程度しっかりした評価という枠組みがむしろ望ましいとは思いますが。

木下川委員

今、練馬区教育委員会はそのぐらいの態勢を維持して研究なり学校の組織を支援しようとしているかという、見えてこないことがありまして、事務局の人たちが共通認識を持ってどういうふうにこの一貫教育を、あるいは教育校を維持していくようにするのか、まだ過渡期なわけですね。その過渡期という認識がなくて、財政的なことから非常に区費講師等の減員を安直にしようとしている。そういう過渡期で道半ばという認識がないままにアンケート調査をやっても、私は無意味だと思います。

少なくとも今回わかったのは、うちの場合だったら、単に小学校と中学校2校分だよなというものの考え方、それおかしいのですよね。小学校でもなく、中学校でもない学校をつくってください。新しい学校をつくってくださいと、そういう認識が事務局になかったのだなということも最近よくわかったのですよ。注目していただくのは結構だけれども、本校においてすら、その程度。ましてやそういうものが担保されていない連携を推進する学校は、もっとご苦労が多いだろうなど。やるならそういうご苦労がいかに多いのかということがちゃんと数値として出てきて、練馬区教育委員会がしっかりとそれを受けとめられるような評価でないと、意味がないと私は思っています。

部会長

そうですね。

やはりそうですね。評価はどうしてもそこに結局施策としてどれだけの腹を決めて、これをやっていくのかという、そうそう、そこにかかってくるので。ですから、この課題は本当にしんどい課題で、どこまでこれをやるのかというのが。ええと、どうしましょうか。今日最後の、全体で集まるのはこれが最後ですので、方向性だけはちょっと考えておかなければいけませんので。

木下川委員

私は、小中一貫教育というのは、負担ではなくて、やりがいがある仕事だから、負担とは思わないです、人間はね。特に教員は。教員というのは、そういう仕事だから、もともとが。ルーティンワークでやっていくような仕事ではなくて、教材研究やっというとなれば、時間を惜しまずに明日の授業のために授業準備に時間をかける、そういう仕事ですから、だから苦労と思わないんだけど、しかし例えば小中でゲストティーチャーというような立場で、中籍

の教員が小の授業をやるとかってなったときには、後補充という考え方もあるけども、やはり授業時数を増やして、そこをやっていくわけだから、教材研究の時間だって少なくなってしまわすでしょう。それでもやっていこうとするときに、講師時数を配当するとか、ましてや、豊玉二中、今度は開四中なんかもそうですけれども、先進的にやろうとしている学校に対する支援というのは必要なわけで、教育委員会のスタッフの人たちの中で、合意形成されていないのですよ。新しい学校づくりということをどういうふうに考えているのか。

新しい学校をつくれといったのは教育委員会ですからね。それで私たちは仕事をやっているわけで、それがまだ半ばの段階で、事務レベルで数値だけ見て、さくさくっと切るようなことをしてはいかんですよ。

委員

感じたままを申し上げれば、小中一貫教育、練馬の重要施策としてやっているという意識は、みんな持っていると思うのですけれども、なかなかうまくいっていないという状況があるということで、評価というのは、ここにも書いてあるとおり、成果と課題を把握しということで、まだまだ課題があるということでやるのだという、そういう前提に立ったほうがいいのではないかなと。そうすると、やはりそのマイナス面が出て、そのマイナス面をどう改善していくかということだと思うので、その改善の仕方はまた方法、いろいろと協議しなければいけない部分があるかと思えますけれども。

あともう一つは、例えば主任教諭、主幹教諭というのは、選考があって、それなりの資質、能力を持った者がやっているわけですけれども、クリエイターというのは、校長が、ではよろしくということで、ベテランの人もいれば、若手の方もいるということで、かなり能力的な差もあるのかなと。だから、クリエイターの調査というのは、そういった調査ももちろん必要だとは思いますが、ある程度、先ほども出ましたけれども、学校を回しているのはやはり主幹等でありますからね。管理職ではない、まさしく実践の部隊ですよ、本当に、学校を回しているのは。だから、そのレベルで聞くということも、より課題というのが見えてくるのではないかなと思うのですね。クリエイターではなかなか言えないところも、主幹級であれば、かなり、常に管理職とも連携をとっておりますので、学校を回しておりますので、というようなことも感じました。

あと、やはり初任者というのは、新しいその全く当人練馬区に入ってきて、学卒、または小中一貫でなかった区市町村から来た方にとっては、非常に新しい新鮮さを持つかもしれませんが、果たして記述という形で報告を上げることができるのかできないのか、せいぜいマルバツつけるとか、そういうような形であれば、何とかなると思うのですが、記述というのは、極めて難しいと思えますけれども。それは非常にこの幅が広がってしまいますし、また言い方が微妙な言い方というのは、一体どういう、どっちの考え方をしているのかというのがわからないので、そうであれば、単純な方法でもいいと思えますけれども。こういったものを新しい方に見てもらって、やってもらってという、それは本当にいい研修にはなると思うので、それはいいと思えますけれども。

あとは、一番の学校評価を各グループごとに協議をして、それでやっていくというのは、これはこちら側としてはやりやすいですね。全て質問項目、教育委員会がそろえてやるというでも、いいかもしれませんが、かなり実践校、グループ研究校、で、1年目、2年目等では、全然違うと思うので、これは任せていただいたほうがやりやすいのではないかなと。

部会長

そうしますと、先生おっしゃっていただきましたが、恐らく最初のその学校評価の活用法につきましては、大体ここに書いてあります線で行けるかなというふうに思うのですね。それからクリエイターの調査は、1つの手法としては、1つ恐らく、これまでもやっておりますので、一定程度これを継続していくというのはできると思いますが、一方で、ずっとご指摘がありましたように、主幹クラスです、それが教務主任にするのか、そのほかの主任も含めてもう少し広く対象にするのかはまたちょっと検討の必要がありますが、とにかく学校の中核的な教員に各学校でのその取組の成果と課題について評価していただくというのは、1つできますし、十分意味のあることだというふうに思います。

ただ、これも先ほど来出ておりますが、恐らく現状では課題の指摘が多々出てくるわけでして、これはやはり教育委員会がどのぐらいそれを受けとめられるのか、受けとめて次にこれをそれに基づいて施策の改善を図っていけるのかという問題ですね。それが伴いませんと、一番冒頭に言いましたけれども、これ、何年か継続してこの評価という作業を続けていくのだと思うんですね。区としましては、1年でやめるというのはちょっとおかしいですので、3年、4年続けていきますと、課題の指摘が毎年毎年、出てくる中で、何も事態は好転しないという事態も予想されまして、それは全体として非常に志気が下がるといいますが、そういう事態も懸念される。ですから、これをやっていくのであれば、やはり力を入れるというのが文言だけではなくて、予算なりそのさまざまな意味での手当てをしていきまないと、評価ばかりが積み上げていって、何も変わらないというのが一番まずい状況ですので、そうならないように願うというしかないですね。

木下川委員

学校評価にちょっと話を戻すと、学校評価に小中一貫の視点の項目を入れてくださいというのは、言われるまでもなく、普通の学校であれば、毎年学校評価の質問項目って見直しますから、一生懸命苦しんで、でも必要なことと思って取り組んでいることであれば、例えば連携校とか何とか校はやっていることについて何らかの評価項目を立てて、もう既にやっている学校だってあるでしょう。

毎年、見直すことになっていきますから、10月とか11月ぐらいでね。それで見直して、やはりちょっと小中一貫の視点を入れなきゃいけないよねと。次は、連携推進の壁はやはり打合せの時間ですよ。会議の時間は十分であったか十分でなかったかといえば、恐らく十分でなかったほうの、下位の評価になりますよね。では、十分でなかったことは学校の努力不足なのかということですか？

それ以上もっとやれということかというのだったら、時間措置をどうするのかという話になりますよね。時間措置をとるのだったら、午後はカットにしましょうかと、授業はなしにして、そういう時間を取りましょうよと。私、これ、変なこと言うようだけれども、そうすると、今度は時間数って授業時間数が確保できなくなってきてしまうでしょう、当然。そんなこと軒並みやっていたら。そうすると、教育課程の届け出だって、中学校だったら1,015時間プラス余剰時間20から30は確保しましょうよといったって、余剰時間を食い潰していったら、今度はインフルエンザとか何とかになったときも、何ともできなくなる。でも例えば会議の時間がないのは、目に見えていますよね。恐らく、先生たち苦労しているわけだから、もっと打ち合わせの時間が欲しい。教育委員会は言うんですよ。「C4thを活用してくださいよ」ってね。では、今日のこの会議はC4thでできますか。やはりこのフェイス・ツー・フェイスで話していいことなんだから、それは申しわけないけど、詭弁なのです。ある程度のことは情報共有できますよ、C4thで。でも細かいデリケートな話のことなんてできっこないわけで、

でも学校評価ってそうなりますよね。では、会議をもう一回、月一増やそう。水曜日にもう一回増やそう、2時間カットして、毎月やればもうちょっといいかもしれないけれども。そんなことできっこないです。今言ったように、単純にまず授業時数の問題だって出てくるし。毎回毎回、そんなふうにカットしていいのかといったら、本末転倒ですよ。そこまで踏み込んでみてほしいのです。アンケートをとるということは、その程度のことは、既に各学校、何らかの形でアンケート項目には入れていると思います。それをどう維持するのかという話です。

委員

水を差すような話ですけどね、桜学園の検証というのに2年間半、2年間ちょっと時間をかけて、ずっと検証を積み上げてきたわけですよ。それをわずか2回のこの会合で練馬区全体の小中一貫教育の評価ということについて、検討するということが、私は、え？ と思いました。そもそも練馬の小中一貫教育というのは、3つの柱をもとに各学校に任されて、自由にやってくださいということで、中身については、学校独自にやっているわけですよ。そこがスタートベースであるにも関わらず、全体の共通の評価をしましょうというのを、わずか2回のこの会合で結論が出すというのは、私は無謀だと思っているのです。ですから、先ほどおっしゃったように、これ、学校評価の中に学校が独自で項目を立てるというのは多分できると思いますけれども、それは教育委員会の評価ではないはず。学校が評価ということであれば、学校評価でいいと思うのだけれども、教育委員会評価と学校評価って、全く別物だと思います。だからいろいろなこの全体の評価を教育委員会がするうえでは、そのバックボーンが課題となって出てくるのは当たり前のお話であって、それを2回の会合でやるということが、とても困難だと思います。

あと、こちらの表、これ、どういう活用のされ方をするのかわからないのだけれども、これが数字で累計されていますよね。項目で何が何校やったって。これって、違うよねって、私は思いますね。もう何度も言っているように、環境的にできないことだっていっぱいあるわけですよ。全く違うわけですから。グループというのが、その数が増えたからいいと、そういう単純な評価ではないよねって。中身ですよ。項目の中の中身をどういうふうにしたかというところだと思うのですけれども。

委員

思いつきなのですけども、ここに質問例や評価方法の(1)に質問例というのがありますけれども、こういった聞き方をするのか、もっと大きく、例えば、この小中一貫教育における成果は何ですかとか、課題は何ですかという漠然とした聞き方で、それを集める、そうすると、何となくみんなは成果と感しているシステムはこれだとか、課題というのはこれだと出てきますよね。自由記述でもいいし、あるいは項目としてありそうなものを幾つか例示として出しておいてマルをつける形で、それ以外にもあったら書いてくださいというようなアンケート調査であれば、課題も成果も両方集まってくるのかなという感じはします。

その上がってきたものを基に、次年度以降のこういうところも少し改善を図れるのではないかというのをやっていこうとあって、そういう会議が持たれるのであれば、そういったアンケートの意味も少しはあるのかなと。

学校独自では、その自分たちがやっている学校のことでですから、その学校評価の中で小中、自分たちでやっている小中一貫について、評価するのは当然のことだと思うのですよね。区内全体のことを聞くことは当然できませんので。各学校のやっている、そういう課題や成果を吸い上げるということぐらいはできるのかなというふうに思います。

部会長

そうですね。これは教育委員会の評価、教育委員会として取り組むものですので、繰り返しになりますけれども、さまざまな学校の意見をしっかり吸い上げて、それに対して教育委員会がその評価を受けてどうするのか、というところが含まれて初めて教育委員会としてその年度の評価は終わるというものにならざるを得ないのです。確かに、2回の検討で合意というのですか、基本路線を決めるのはちょっと難しいですね。

こちらのほうは、いろいろこういうところで大体意見は出ているのですが、教育委員会事務局としては、どうでしょうか。

事務局

いろいろとご意見を賜りまして、ありがとうございます。

これまでの経過ということも踏まえながらということでの発言ということで、失礼がありましたら、ご容赦をいただきたいと思います。

まず1つ、大きなものは、教育委員会の態勢ということにつきまして、桜学園、施設一体型の学校の運営ということで、ご尽力いただきまして、先般、研究発表ということで、1つは、1つの区切りではなくて出発というのか、進水式が終わったという、まさにそんな認識を持ってございまして、区教委としまして、2校目の教育一貫施設一体型をつくっていくということを政策としても大きく掲げているものでありますので、教育委員会の態勢づくりというのは非常に大きなものと認識してございます。

次年度以降の小中一貫教育の推進につきましては、区役所だの区教委自身の組織づくりの問題もございしますが、そこを十分に踏まえたくうえで、やっていくというように考えているところでございます。

それゆえに、一緒にやっていく態勢づくりというのは常に頭に置きながら、動いていきたいと思っております。これが1点です。

2点目であります。評価でございます。これについては、今その2回の関係でどうなのだと。これはもっともなことだと思っております。一方で、その桜学園での取組というものを何年間か検証してきたということを前提として、物事を考えていくというのも、1つあるのかなと思っております。この評価方法を確定するというふうにして会を閉じていただくのか、あるいはこういうような方向性だというふうなことで閉じていただくのか、いろいろ縷々いただきましたご意見を検証、推進会議のほうに部会から上げていただいたものを提言という形でいただいて、それを区教委としてどう判断するかということは、1つあるかと思います。部会としてのまとまりをあえてここまでとつけられないというご意見が大半ということでございましたら、1つの結論だと思っております。

協力委員

調査をする立場として、こういうふうなほうがいいのではないかなということを言います。

教育委員会の意見を反映してという感じではないのですが、基本的に成果と課題を把握するとき、評価で数値をいろいろ出してくるということはできると思うのです。その数値を見ることは、当然大事なことですけど、数値だけだと実は一番大事なところがわからなくて、その数値がそういう結果が出た理由というのはわからない、何でここが課題として、例えばさっきのクリエイター調査ですけれども、例えば実践校になった途端に、評価が下がったというのはなぜ起きるのかということは、この数値だけでは絶対にわからないのです。先ほど

の発言で言われたとおり、これは学校側の努力が足りなかったからではなくて、そもそも予算配置がちゃんとされていなかったから、このまま実現できなかったのだという背景があるのではないかというような話というのは、多分自由記述であったり、ヒアリングしてみたりであったり、実際に話を聞いてみないとわからないことです。それは多分、大泉桜学園の検証のときに一番よくわかったことではないかなと思うのですけれども、数値だけ見てもわからないことが実際に先生方のお話を聞いてみて、新たにわかったということがあるので、例えばクリエイター調査をやるにしても、それに自由記述をしっかりと書いてもらったり、そこでやっと何かその数値の意味というのがわかってきたりであったり、あとは学校評価もそうですけれども、数値で見たときに、あれ、ここは何でこういう結果が出ているんだろうというときも、やはりヒアリングという形でお話を聞きに行かないと、本当の理由はわからないのではないかということ調査という観点から見ると思いますということがあります。

木下川委員

今の話でちょっと思ったというか、そもそも最初に戻して、区教委としては統一したその連携教育の評価を、評価項目を学校評価の中にドッキングさせたいのかどうかということなのです。だとすると、ちょっとそれはやはり無理があるかなと私は思います。

その理由を言います。学校評価は学校がやるものだからです。そしてそれは、区教委自らがおっしゃっていることで、特色ある学校づくりをしてくださいと。そしてその特色ある教育活動がどのように1年間できたのか、安定的、継続的な公教育がきちんとできていたのか。それを評価するのが学校なわけで、当然、特色も含めてオリジナリティーの強いものになってくるわけだから、そこに全く形式的に同じものが入ってくるということは、そこにちょっと違和感がある。学校評価の性質を考えてするものである。

なおかつ、でも学校評価の中に小中一貫教育の視点を入れてよねと、これは当然のことです。設置者である教育委員会として。であるならば、学校評価というのは、これはそもそも教育活動と校長のマネジメントをもう一回見ていくものだから、所管は教育指導課かなと思うのです。だから、教育指導課長が校長会で「来年度は小中一貫の視点でも評価項目を工夫してください」と言うことについては、何ら問題はないだろうなと思います。

ただ、12月って、遅いよね。言うにしても。なぜなら、うちの学校だってもうほとんど見直しして、ぼちぼち印刷して、今日の職員会議で周知徹底を図って、12月にはもう保護者子どもも含めて、もちろん教員も含めてやるわけだから、実は時期的に言うと、現場の校長としては、提案を拒むものでもないし、やって当然のことです。小中一貫は、学校経営、学校運営の中の大きなウエートがあるわけだから、そしてさらに将来的な見通しを持って、取り組まなければいけないことだから、そこに学校評価の評価視点を入れるということは、何ら不思議ではない。それを反対するというのはおかしいなと思うけど。

部会長

これは、検討した際にも区全体で共通項目で評価するという発想には、もともとそれは先般のここでの話し合いの中で、それはちょっとやはり難しいし、それはそもそも違うのではないかという話だと思いましたので、ここにも書いていますが、グループごとに独自のその今年度の課題というのを定めていただいて、それについて各グループごとに評価の中にそれを評価する項目を何項目か入れていただくという、そういうやり方を想定しています。ただ、そうしますと、多分、各学校でばらばらな評価が出てきて、それは学校評価ですので、学校の取組を学校が評価する性格のものです。そうなるのは当然なのですね。それを区側がそれを取り込んで、

では、どうするのかというところが、ちょっとしっかり考えておきませんと、いろいろな学校からいろいろなその学校評価が出てくる。実際どうするの、それに基づいて区としてこの小中一貫教育の取組の成果と課題をどう把握するのかを考えておかないと、集めただけになります、今度は。だからそのあたりが本当に先生がおっしゃるように2回の検討で詰めて話すのは非常に難しいんです。課題山積だなと思いますね。

委員

先ほど、1番については、いいと私は言ったのですが、これ、今年の12月ということですよ。

部会長

いえいえ、これはもう来年です。

委員

それならば、いいのです。今年の12月はまだ無理です。うちも小中連携関係の項目を入れていきますけれども、もう学校評価はほぼでき上がっていますので、12月の上旬には保護者、生徒、あと教員等でやっていくので。

部会長

次年度以降の取組としての提案にすぎません。それで、そういうやり方としては、先ほど先生が言われたように、もう少し大雑把に小中一貫の成果と課題について、主にこれは教員対象上の評価だと思いますが、それについて少し自由に書いていただくなり、幾つか項目を用意してとか、ピックアップしていただくなり、そういうやり方もあるとは思いますが。

委員

学校評価にこうやって入れるのは、それは学校評価なのでいいと思うのですが、先ほどちょっと申し上げたのは、やはり教務主任クラスにそういったアンケートをとると、学校の生の実態が集約できるのではないかということです。連携クリエイターはクリエイターで、先ほどお話がありましたけれども、校長に任命されて6年の担任だからクリエイターやれとかいう人もいますけれども、クリエイター自体のその意識を高めるためには、こういうのはあったほうがいいのかという面もあります。

部会長

そうですね、その啓発的な意味がありますね、これは。

委員

ただ、このクリエイターのアンケートが学校を正しく反映しているかということ、それはやはりそうでもないのかなというふうに思います。クリエイターの調査というのは、クリエイターの意識を高めるというのが一番の目的でやられると良いのかなと思いました。

ただ、学校を把握するには、やはり全体にアンケートをとっても、やはりいろいろな学校全体が見えているクラスに絞って、とったほうが実態はよりわかりやすいのかという感じがいたします。クリエイター以外に、学校幹部職員、主幹または教務主任にアンケート調査をするのが良いのかなという気はいたします。

部会長

今のお話ですと、内容的には学校評価の使い方をかなり詰めなければいけませんけれども、各学校の独自の取組としての小中一貫教育の成果と課題を評価するような項目を入れるという、学校評価を活用する部分と、それからクリエイターのところでは、これまでもやっておりますし、啓発的な意味が非常にありますので、それを今後も継続してやっていく。内容は年度ごとに見直す必要があると思いますが。

それからもう1つが、先ほど来、先生がおっしゃってくださったような主幹クラスの先生なり教務主任の先生を対象とした小中一貫の各校に、学校における小中一貫の取組の成果と課題をある程度正確に把握するためのアンケートという、そういう組み立てですね。

委員

もうちょっと追加していいですか。今ちょっと教務主任のところはそのアンケート用紙が届いたことを想像してみると、結局、教務主任はこれはかなり荷が重いなということで、副校長に相談に行きますよね。それで結局校長がそれ最終的にチェックして、これでいいかって出すことなので、結局は学校に調査するということになりますよ。

そういう調査で、教務主任だけにそういう区の、場合によっては区の政策に反映するような大きな調査をするのは、ちょっと負担がかなり重いのかなと思います。

部会長

そうですね。難しいですね。では、どうしようかな。

委員

だったら学校への調査ということで割り切って。

部会長

単純に学校への調査という形で成果と課題について指摘していただくというようなタイプのものを。

委員

主に教務主任にとれでもいいんですけども、管理職と相談をしてとる学校が多いと思うので、結局は学校としての評価を。

部会長

そうですね。とにかくそれで各学校ごとにその上の取組について、成果と課題を、学校としての評価を報告してもらおうというような類の調査です。で、これでもう1つ、また戻るんですけども、それは実施するに当たりまして、区側の恐らくこの評価の意図といいますか、目的をしっかりと明示しませんと、やっただけの評価で、そうすると、3年か4年経ちますと、何のための評価かということがかなり問われることになります。ですので、先ほど来、ずっと話題になっております区としてのこの小中一貫の取組に対する意志といいますか、意気込みをどこかでもって示さないと、これはかえってぎくしゃくする火種になると思います。

木下川委員

同じことを言うことになるのですが、とにかく今、大変だという声が練馬区内を席卷しているわけです。でもそれは、崇高な理念って大事ですよ。こうしていききたいのだという、理念のためには、これはもう仕方のないことなので、頑張るしかないのです。私はそう思っています。練馬区の学校では、もう全部がね。ただ、大変だという文言の中に、1つさっき言った、打ち合わせの時間、会議を持つ時間も大変なのだよと、そこを誤魔化した評価というのは、できないです。それを何らかの形でとれば、恐らく下位の評価が出てくる。では、その下位の評価で出たもの、教員の努力不足とかにすりかえるわけにはいかないです。では、それはどうやって、部会長がおっしゃったことと同じかなと思うのだけど、どの覚悟でその出てきた下位評価に対応する、それは現場がもっと工夫しろって、そういう話ではないですよ。C4thでうまくやっていくのだよと、そういう話ではないでしょうと。そこにやはり目を向けて、評価をやってほしいですよ。

それからもう1つ言わせてもらおうと、さっきやはり私もちょっと気になっていたのが、このいろいろな実践の例が出ていますよね。表になっていたのだけれども、いろいろなことをやるのはいいんだけど、こう言うとまた怒られてしまうのだけど、何かリトルティーチャーやらなければいけないよね、何とかしなければいけない、かんとかしなければいけないよって、こういうことをやっている段階は、やはりもう多忙感が拭えないですよ。もう次のレベルにきているのではないですかということを私は言いたいです。

例えば、私はリトルティーチャーというような考え方で、中学生に子どもの、小学生の授業をさせるつもりはあんまりないのです。それは、免許も持っていない素人に教えさせたって、授業の質が高いわけではないので、やはりプロがちゃんと責任を持って教材研究、授業研究をした上で臨んだほうが、1時間いい授業ができるので、リトルティーチャーっていう考え方はないのです。基本的にやるつもりはない。ただ、連携をやっている中で、ちょっと中学生が来て教えるということで、中学生もこう、気持ちが高まったり、モチベーションが高まるというのは、イベントとしてはいいけれども、そんなことは継続性のあることではないし、学力向上させるなんていうことを考えたら、そんなものではないと私は思っている。

けれども、年上の子が年下の子に何らかの形でリーダーシップを発揮して、いろいろ導いたり教えるということは、うちの学校はもうごまんとやっています。やはり異学年を交流させるということは、例えば総合的な学習で調べたことを下級生に聞いてもらって、下級生から質問してもらおうと。真剣勝負ですよ。そういう工夫はしている。それで、そういう1つのちゃんと共通項目で行事でもいいし、何かその企画について小学校の先生と中学校の先生が共同で作りに上げていこうとすると、壁は取れるんです。同じことをやろうと。すると、小学校の文化だとか中学校の文化だとか、そんなことを言っている暇はないですから。子どもたちのためにその時間が充実したものにするためには、アイデアを出しながら、子どもたちの動かし方とか企画を考えて、そういったときにはやはり小学校の先生も中学校の先生も1つのものを作ったよねという気持ちになれて、うちの学校がもし評価していただけるなら、職員室も1つで、そういう環境を整えていただいたから、そういう話し合いとか取り組み方がしやすいと思っています。

だから、やっていくには、やはり何らかの形でそういう環境を、離れているのだから職員室でするわけにいかないわけだからやはり、もう次のレベルだよね。というのは、こういう表に出ているようなことで、これやりました、あれやりましたではなくて、もうちょっと学校同士で何か作り上げられるような創造性のあるようなものが取り組めると、本当にいいのだろうなと私は思いますね。それがどういうものかは、ヒントはこの表の中にあると思うのだけど、もっと取捨選択していく必要もあると思うし、今やはり厳しいと思いますよね。こんな表を見たら、うちはここやっていないのに、やらなければいけないのかなとか、そういう感じで見てし

まうし、どうしたってね。でも、こんなことできないよなとかね。うちは一貫だから外れるから、気楽に見られるけど、この中に自分の学校があったら、嫌だなという感じですよ。すごく火をつけられたみたいで。そう思いました。

事務局

本日お配りしております学校別の取組状況表については、集計前の資料ということで公表はしておりません。

委員

今の意見で思ったものですが、確かに研究校のときは、何かやらなきゃいけないという意識が非常に強いので、では、これ、できるだけやってみようかなというふうに意識が働くわけですね。大体研究が終わったら、もうやらないのが普通の学校の文化なので、そうすると、この小中一貫の研究というのは、非常に息の長いものだとは私は認識しているのです。ですから、研究校のときにあんまり何でもできる、これもできるとがんとやってしまっ。翌年維持できなくなるというような研究だけはうちの地区はしたくなかったんで、未永く続けられるものを試行していきましょうというような発想でやっているんで、恐らく来年以降もそんなに負担をかけずにいけるのではないかなと思っているのです。これはこれで、資料としては、こういう活動もあるのだというので、これは今見せてもらったのはこうなのだと思いますけれども、お互いのこの検証値のために、その各小学校、中学校がものすごくエネルギーを消耗してやらないでいながら、なおかつその小中のこのいい接点を学校同士で見つけていくところなのかなというふうに認識して、3校の校長とはお話し合いをするようにしています。

部会長

もうこれで研究指定はもう次でおしまいなのですね。

事務局

今年度でおしまいです。来年度新たな指定はないです。

部会長

ないですね。ですので、次から全て実践校、研究指定の外れた学校になりますので、その中で先生の言うように、練馬区として息長く、この小中一貫を続けられるような評価もそういう構えでやっていく必要がありますし、区としても、それをどう支えていくのかということを考えていかないといけないと思うのですね。

委員

そのためには、もう先ほどからここに出ているように、教育委員会がどれだけバックアップしているかということにかかると思うのですよね。予算措置をとるから、講師を呼んでもいいですよということになれば、学校はそういうふうな取組を考えるわけだし、何とかの特色ある学校予算はもう、なくなってしまったけれども、小中一貫教育推進予算みたいな、そういう予算立てを学校にして、学校がある程度自由に使えるようなお金をやはりしてほしいです。

実際にやっている先生方が、その小中一貫教育に対してどういうふうにして取り組んで、成果と感じているかという、その実の部分が一番大事なところであって、管理職がマルすると、どうしても甘くなりますよ。アバウトになりますよ。そうすると、見えてこないです。そうい

う形だけの調査というのは、やはり避けるべきだと思うので、やはり学校だけの調査というよりも、教員レベルで、例えば学年主任レベルまで落とすとかね。

部会長

そうすると、各学校で複数名、何人かの方を対象としての調査という形ですね。

委員

ええ、学年主任とかね。やっている人の調査も必要であると。ただ、項目を何にするかということですよ。中身の検討をするだけでものすごい時間がかかると思うのだよね。

部会長

そうですね。

委員

開き直ったように、成果は何ですか、課題は何ですかと2項目にしたらいいのではないかな。

委員

いや、そうしたら課題ばかり出るでしょうね。だって、途上なのだから。

委員

それはそれで受けとめればいいです。でも成果は多少はあると思います。

委員

いや、うちなんかはまだ1年目の授業研究やっていて、本当に指導法がどう変わるということに全然行かないですから。

委員

でも、中学校の授業って、こんな感じなのだというのがわかったことは。

委員

あ、それは知識としてはわかる。

委員

だって、それぐらいのことしかないです、最初は。そういうことで幾つか例示しておけば、そこにマルがついていくのではないかなと思います。生の姿を知りたいと思ったら、やはり今言われたとおりのことやらないと、生の姿というのは、校長が書いていたら、やはり教育委員会の期待するようなものしか、期待すると言ったら悪いですけども。その施策がうまくいっているのだというような答えが一番多く返ってくる。

木下川委員

こんなこと言ったらおかしいけれども、練馬区はこれをやったことによって、小学校とか中学校の文化の違いという、よく言われるのが、かなり融和が進んだのではないかと思います。恐らく、相当。これまでは恐らく日本中の多くの学校は、偏見に近い誤解があると思いますよ。

練馬区は、小中の理解が進み、モラルみたいなものが構築できたのではないかなと思います。

委員

それは一番大きな成果ではないかな。

木下川委員

でしょう。だって、少なくともそういうことを言ったら、やはり自分の、天に唾するようなものだなという、そういう要は意識改革ですよ。これは練馬区はこれをやることによって、大きな私は成果だと。でも、やはり先ほど言われたように途上だからね。それはやはり不満がたくさんありますよ。うちだってまだ途上ですからね、さっきちょっとエキセントリックに言いましたけれども、あのぐらい言わないとわかってもらえないからね。やはり戦っていないといけないなと改めて思っているのですよ。

部会長

それで2校目という話がありますよね。ですので、それをやはり推進していくということも考えますと、全区的にやはりこれからやはり継続して小中一貫をやるのだということに持っていきませんと、2校目も結構きついと思いますね。

木下川委員

今のままではね、2校目づくり始めたころに、ああ、このままだとやはり尻すぼみになってしまう。それは私としてはとても責任を果たしたことにはならないから、そうならないためには、やはり申しわけないけれども、桜学園にもちゃんと日の目を十分に当ててもらわないと困る。補給路も断ってしまうみたいな雰囲気ね。そういうつもりはないのだけど、財政のせいにしてね。それはだめですよ。小中一貫教育推進費、そういう特色予算ぐらいはなぜ立案してこなかったのか。つまり、教育委員会がカバーしていないですよ。

部会長

大体そんなところですかね。2回のやはりその短期間での検討ですので、評価を巡る検討課題だけが追記されたという形でしか多分出ないと思うのですね。親会議に上げていただいて、親会議としてこの小中一貫を今後どうするのかということをしっかり提言してほしいという話だと思うのですね。その枠組みの中で、具体的にこれをさらにより良くしていくための評価の在り方として何ができるのかということ具体的に検討するという、そういう流れだと思います。

そこで具体的に出てくる話としては、今日検討しましたこの学校評価の活用ですとか、クリエーターの調査ですとか、それから中核的な先生方へのアンケートですとか、そうしたことが具体的には案として検討されているぐらいのところではないですかね、今の段階では。本当に。これは一方でそれを評価をする側の姿勢を明示させないと、尻すぼみになっていくというか、嫌な雰囲気だけが残っていく可能性が非常にある課題だと思いますので、そんなようなことです。

どうですか、一応戻しますか、事務局に。

事務局

ありがとうございます。

今回がまとめの部会ではありますので、一定程度、まとめていただかなければならないんですけども、今部会長におっしゃっていただいたように、学校評価とクリエイターの調査と、それから現場の先生方への中核的な先生方への、教務主任あるいは主幹クラスの先生への成果と課題をお聞きするアンケートをというような案ということで、一応まとめさせていただけるのかなと思いつつながら、ただ、前提条件として、課題が出てきた、集めた課題に対して、どう改善する覚悟と態勢を教育委員会側で整えなければ、そもそも評価をしていく意味がないというようなことと、全体の評価について、わずか2回の検討では、ちょっと検討しきれないということで、案は案として、今後もさらに検討が必要というようなことでのまとめということで、よろしいでしょうか。そういった形で部会からいただく。本当でしたら、もっと検討期間を延ばすですとか、部会を延長するですとか、そういったことをするべきなのかもしれないんですけども、2校目の検討をということを少し進めたいというスケジュール的なものがあるから、その前に一旦、小中一貫教育推進会議の提言というのをまとめ、まとまった形でいただきたいといった事務局としてのスケジュール観みたいなのがあるものから、一旦はここで区切りをつけていかなければならないという状況にありますので、ご指摘は全くごもっともなんですけれども、何らかの形でまとめをいただきたいなというところです。

ですので、これが今後の評価方向ですよというまとめではなくて、案としてはこういうことが考えられるけれども、幾つかの条件と注文がありますよというようなことでいかがでしょうか。

教育企画課長

中間のまとめということの中で、もう1つは態勢の話も出ました。これも私どもとしては、非常に大きなものとして受けとめさせていただきまして、来年にも小中一貫教育担当の態勢づくりということも含めまして、引き続き新態勢の中でもこの評価というものは検討していきたい。今回は推進会議の部会という位置付けでございますけれども、この位置付けでない形でも何かしら小中一貫教育の評価の態勢というものを検討するということを宿題としていただくことになるのかなというふうに認識してございます。もし、こういうことでこの部会としての私からの発言ということで記録も含めて残しながら、推進、親会議のほうに上げていただければというふうに思っております。以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

部会長

そうしましたら、基本的な取りまとめの方向としましては、今事務局がおっしゃってくださったようなまとめで、親会議のほうに上げさせていただくということでしたというふうに思います。

それで、本当に繰り返すようなんですけれども、全区的に小中一貫教育を今後もしっかり進めていくという区の姿勢が問われていますので、先ほど先生がおっしゃったように、これは2校目の検討が始まるから早くせいという話なのですが、新しい学校をつくれれば、それでまたおしまいという話ではないので、大泉桜も含めて全校のその実践がしっかり進む、それがその中で、授業改善が進んだり、共通理解が進んだりというようなことが図れるような方向で、施策が展開されるようお願いしたいというふうに思います。

これ、時間をかけてこれだけやってきたことが水泡に帰しますので、非常にそれだけは避けたいというふうに思います。

早く終わってしまいましたが、先生方の意見が、大体集約されてしまいましたので、取りまとめてしまいました。何かご感想ご意見、れだけはぜひ言っておきたいということがありまし

たら、いかがでしょうか。

では、これで会議としましては終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

全員

ありがとうございました。

(閉 会)